

ひろしまレポート

第35回広島平和記念式典参加事業



松 本 市



広島の平和記念公園内に設置されている「平和の^{ともしび}灯」

「平和の灯」は、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という趣旨で1964年8月1日に設置され、全国12宗派から寄せられた「宗教の火」と溶鉱炉などの全国の工場施設から届けられた「産業の火」が、1945年8月6日生まれの7人の広島の乙女により点火されました。

目 次

○ヒロシマの願い

○レポート

八十年前のあの日	清水中学校2年	秋 山 優 人	・・・ 1
自分たちで出来る事とは	鎌田中学校2年	中 川 愛 夏	・・・ 2
「私たちに託された願い」	丸ノ内中学校2年	須 藤 美 遥	・・・ 3
生きたくても	旭町中学校2年	宮 川 彩奈咲	・・・ 5
平和への誓い	松島中学校2年	宮 林 愛 理	・・・ 7
広島を訪れて感じたこと	高綱中学校2年	鶴 川 千 尋	・・・ 9
広島悲劇と平和を願って	菅野中学校2年	丸 山 恋	・・・ 10
時を越えて届く声	筑摩野中学校2年	小 笠 原 心南	・・・ 12
平和への第一歩は	山辺中学校2年	澤 渡 千 月	・・・ 13
ヒロシマの街を焼け野原にした一発の核兵器	開成中学校2年	本 橋 侑 弦	・・・ 14
広島平和記念式典に参加して変化した僕の思い	女鳥羽中学校2年	細 野 琉 斗	・・・ 15
戦後80年の区切りで	明善中学校2年	加 藤 優 真	・・・ 16
平和な世界を願い	信明中学校2年	上 山 智 実	・・・ 17
「80年たっても」	会田中学校2年	横 内 日 和	・・・ 18
平和な日々を守るためには	安曇中学校2年	太 田 美 言	・・・ 19
衝撃を受けた三日間	梓川中学校2年	三 枝 光 宇	・・・ 20
広島惨状と希望	波田中学校2年	和 田 真	・・・ 22
「広島に行って思ったこと」	鉢盛中学校2年	網 野 晴 琉	・・・ 24
記憶を繋ぐために	信大附属松本中学校2年	鬼 頭 岳 暁	・・・ 25
ヒロシマの想い	才教学園中学校2年	西 村 綾 乃	・・・ 27
忘れない。伝える	松本秀峰中等教育学校2年	千 葉 聡 希	・・・ 28
私が学んだ平和の大切さ	松本国際中学校2年	藍 つかさ	・・・ 29
広島訪問	松本ユース平和ネットワーク	高 山 稀 創	・・・ 30
広島で感じた「平和」の重さ	松本ユース平和ネットワーク	藤 岡 絢 香	・・・ 31
広島で学んだ平和への意識	松本ユース平和ネットワーク	山 崎 花 峰	・・・ 32
広島の旅を終えて	松本ユース平和ネットワーク	花 岡 佑 紀	・・・ 33
○写真記録			・・・ 34
○広島平和記念式典			
平和への誓い			・・・ 37
平和宣言			・・・ 38
○参加者一覧			・・・ 40
○旅の日程			・・・ 41

※掲載のレポートについては、できるだけ本人の作文を尊重しています。

ヒロシマの願い

The Prayer of Hiroshima

「^{げんばく}原爆^おに会った」と、^{ひばく}被爆した人たちは言います。一瞬の破壊、あまりに多くの死、大切な家族さえ救えなかった苦しみ——言葉では表現しきれない出来事に「出会って」しまったからでしょう。あの8月6日とそれに続く日々は、「思い出すことさえつらい」ことです。被爆者はその思いを乗り越えて自分の体験を語り伝え、再び核兵器を使ってはいけないと、広島^{ヒロシマ}の地から訴えてきました。

「ヒロシマ」は世界共通の願いと結びあい、平和を実現したいといつも願っています。

Hibakusya say simply, "I met with the A-bomb." Perhaps they use this expression because the event they "met with" defies description an instant of massive destruction, mind-numbing death and injury, and the grief of watching helplessly as family members, relatives, friends, and neighbors died in agony. They also say, "It's painful even to remember." The A-bomb witnesses have overcome that pain and are passing on their experiences of that day. They feel duty bound to tell the world why nuclear weapons must never be used again.

The continual prayer of the A-bombed City Hiroshima is to unite humankind toward our common goal, genuine and lasting world peace.

(広島平和記念資料館 収蔵品より)

八十年前のあの日

清水中学校2年

秋山 優人

ピカ・ドーンという音が鳴り、8月6日午前8時15分に広島町は一瞬で草木も生えないうしろと言われた焼け野原へと変わってしまいました。

これが八十年前のあの日広島におこってしまった事です。「この時の広島はまるで地獄のようだった」と被爆者の梶本さんは語りました。

この言葉は僕が聞いた中でも一番心に残り、忘れたくても忘れられない言葉でした。その言葉から始まった梶本さんの話を聞いていき、被爆した方はみな皮膚がただれ、かみの毛はおかしな形になって「水をください」、「助けて」と言って亡くなったと聞いた時すごく衝撃でまさに「地獄」という言葉があっているなと思いました。その後見学した平和記念資料館では、当時の絵や、衣類などが今も生々しく残っていました。他にも、全身にやけどをおった子どもの写真や遺品、まさに資料館の中はすごく空気が重く、話したくても話せないような場所でした。一人一人亡くなった方の話を読んでいくと、辛くも幸せな日常が一つの原子爆弾によってそのすべてがうばわれてしまったことを知った時、今自分たちがあたり前に、食事をとって安心してくらせている事があたり前ではないと知って平和の大切さも学べることができました。

昔日本でこのような事があったのに今でも9カ国が保有していて今ある原子爆弾の数は

一万二千二百四十一発あることが分かっています。今この爆弾が使われてしまうと人類が減ってしまうような力をもっていることが分かったので日本の長崎、広島に投下されてしまった2発の原子爆弾を最初で最後にして、世界中へ原子爆弾のはいぜつを求めることが大切だと分かりました。

そのためにも今私たちのせだいでほとんどの人が利用をしているSNSなどでも戦争や原爆の内容のとうこうをしていけば、はいぜつにもつながるし、今私たちも協力したりすることができる一つのしゅだんということが分かりました。

2日目の江田島旧海軍兵学校では日本全国から集まり、神風特攻に出た人たちの名前が書かれていました。その中には、まだ18才の方が特攻をして、亡くなってしまったという事を学ぶことができました。私はこの3日間の学習の中で色々なことを学ぶことが出来ました。そうして今戦後八十年になり、戦争体験者の方々も少なくなり話を聞くきかいがなくなってしまっている、これからの世代にもこのくりかえしてはならない日本のあやまちを伝えることが今私たちにできることなので、忘れず伝えられるきかいがあれば伝えていくのが大切です。そうして、「今の平和があるのは80年前命をはって戦ってくれた人がいるから」ということは忘れないでほしいです。

自分たちで出来る事とは

鎌田中学校2年

中川 愛夏

1945年8月6日午前8時15分。たった1つの原爆で広島がいきなり変わりました。私は初めて広島を訪れましたが、原爆ドームを見た時、ぞっとしました。鉄骨がむきだしになったドーム、建物は、ガラスがなく建物の中まで見えて、外壁は黒く、下には、岩などが散乱していました。この時私は、戦争は絶対に起こしてはいけないことだと改めて思いました。それは、被爆者の方の話を聞いた時も同じでした。真っ青な光がパァーと流れ、爆発音がして、地面が盛り上がり、体が宙に舞う。これを聞き私は、爆発で体が宙に舞うほど、大きな爆弾だと思いました。皮ふが垂れ下がる人、水を求め空からふりそそぐ放射線をあびる人、川には熱さから逃れるため、入ってそのまま死んだ人の遺体が、ぎっしりとあった。生き残った人も、急性障害で吐き気、脱毛になったり、後障害で、ケロイド、白血病になり、多くの方が亡くなりました。たった1つの原爆でも、多くの尊い命がなくなり、大切な人がいなくなり、今までの生活が出来無いとなると、私は、つらくてつらくてたまらないと思います。ですが、一生懸命生き、つらい思い出を私たちのように若い世代に受け継いでくださる被爆者の方など、この出来事を絶対に風化させてはいけないので、広い視野、色々な視野、考えをもち、命の尊さを大事にしてほしいと教えて頂きまし

た。今でも世界では、戦争が続いています。原子爆弾のような核をもっている国があります。もし、それを投下してしまうと、広島や長崎より、大きい被害になってしまいます。そうならないためにも、平和について向き合い、考え、それを形に残し、達成できるようにすることが大切なのではないかと思います。

「私たちに託された想い」

丸ノ内中学校2年
須藤 美遥

8月6日、強い日差しの青空の下、広島市に平和の鐘が鳴り響き、多くの人が80年前のヒロシマに想いを馳せました。

私は松本市内の中学生の代表として2025年8月5日から7日まで広島を訪れました。私がこの三日間で見たのは、木々や草が育ち、鳥たちが楽しそうに歌い、人々が行きかっている、松本市とほとんど変わらない広島と、海まで見通せるほど何も残っていない、がれきと遺体と絶望であふれかえっていた80年前のヒロシマです。二つの姿は完全に反対でした。そのため、まるで何事もなかったかのような今の広島の姿に、その地に立った私は「80年前のあの日は別世界での出来事なのではないか」と思いました。ですが、広島市内に残る原子爆弾の傷跡、あちこちに置かれている慰霊碑や水場が、原子爆弾の投下は現実で起こったことであると訴えていました。その中でも一番私自身に衝撃を与えたのは被爆者の生の声です。

今からちょうど80年前の午前8時15分。原子爆弾が投下されたあの日からのヒロシマでの体験を私たちに話してくださったのは、梶本さんという被爆者の方です。当時14歳、私と同年でした。この日は建物疎開のために8500人の中学生が集まった日で、梶本さん自身は工場にいたそうです。青い空の下、強い日差しの中で「暑いね」と話しながら作業してい

た、いつも通りの朝でした。そこに落ちてきた一発の原子爆弾がヒロシマの街を変えました。梶本さんは爆心地から2.3km離れた場所で被爆されました。光に包まれた梶本さんの体は建物と一緒に爆風で吹き飛ばされ、気づいた時にはがれきの下敷きになっていて、頭と手以外はすべて動かない状態だったそうです。やっこのことで出てきた梶本さんが見たものは地獄でした。自分の足や友達の腕の大けが、がれきの下敷きになっている人、そこら中に転がっている死体、家も太陽もない街、さっきまであったヒロシマは形すら残っていなかったそうです。火事から逃げるために広い場所へ向かう人々の中には、誰かもわからないほどにけがをしたお化けのような人も大勢いました。まだ生きている人を助けるために通る道は、死体や体の一部で埋まりぬるぬるとしていました。その道は私の想像を絶するものでした。そんな道を何度も通った梶本さんたちは次第に人らしい感情をなくしていったそうです。しかし惨状はこの日だけにとどまらず、毎日広島にある七本すべての川に人や馬の死体が流れていたり、物資や食料、水すらも足りずにたくさんの方が亡くなっていったりしました。放射線が見つかったのはだいぶ後のことだったので、気づかぬうちに受けていた人々は原爆症やがんなどを発症しました。

このように、原子爆弾は物理的攻撃をすると同時に、精神的苦痛を与えることができちゃう爆弾です。そして、生きたいと願う人たちの人生を簡単に狂わせることができるのです。こんなにも恐ろしい爆弾は広島に、そして長崎に落とされました。それでも自分たちの当たり前を壊された人々は絶望の中でも希望を求めて懸命に生き続けたのです。残された自分たちにできることを考え、私たちにあの日のヒロシマを伝え続けてくれました。しかし、戦後80年を迎えた今、生存する被爆者の平均年齢は86歳を超え、10万人を切りました。被爆体験の生の声を聴くことは難しくなり、被爆者がいなくなる日も近づいています。そんな中で私がしなければいけないこと、それは事実や思いを伝えていくこと、そして人に優しくすることだと思います。生きたいと願う人の命を奪える権利は誰にもありません。だから、二度と同じ過ちを繰り返さないために、「戦争のない平和な世界が当たり前」という考え方を全員で作りに上げていかなければならないと私は考えます。そのためにも、自分と違う考えを持つ人と対立するのではなく、相手の考えを受け入れたり一緒になって考え対話を続けたりしていけば、平和に向かって歩みを進めていくことができると思います。

そして、当たり前はもともとあるものではありません。自分たちが作るものです。一つ一つの幸せを感じながら今を生きることを大事にすることは「平和が当たり前」という考え方を

生み出し、後世に残していくことができると感じます。それこそが未来を生きる私たちに託された役割なのではないのでしょうか。

生きたくても

旭町中学校2年

宮川 彩奈咲

私は広島へ行き、戦争や原爆の恐ろしさについて学びました。人々の体や心に刻まれる傷を植えつけたのは、今から八十年前の八月六日、八時十五分に落ちた、一発の原爆からです。戦争がない今の時代に生きている私たちには想像もできないことです。

私は今回広島に行くまで、戦争のことをそれほど知りませんでした。そのため、衝撃的なことが三つありました。

一つ目は、実際に被爆された方のお話をお聞きしたときです。被爆された方は梶本さんといい、被爆された当時は、私と同じ十四歳だったそうです。梶本さんが被爆された場所は爆心地から二キロ以上も離れたところだったそうです。原爆の被害は範囲が広く、それほど威力のある、恐ろしいものだとなりました。それに、梶本さんは、「人を大切にしてほしい。」とおっしゃっていました。当たり前のことだとしても、実際に被爆された方の言葉は、とても心に響くものでした。

二つ目は江田島旧海軍兵学校の見学に行ったとき見た資料です。それは、三浦虎次郎という方で、「勇敢なる水兵」という歌のモデルになった方です。この方は十八歳で戦死してしまい、亡くなる前「天皇陛下万歳」と言ったそうです。戦争は国のためだと言われていたのは聞いたことがありますが、多くの人が亡くなる前

は家族のことを考えていただろうと思っていました。ですが、まだ十八歳の青年が国や天皇のことを考えて亡くなることに、言い表せない衝撃が襲ってきました。

三つ目は、広島平和記念資料館を見学したとき見た、原爆で変わってしまったものです。それは、お弁当や三輪車です。どちらも炭で黒くなっていました。小学生のときに国語の教科書に載っていました。実物を見て、作り物なのではないかと考えました。それほど、信じられない、信じたくないものでした。

他にも、原爆が落とされる前の広島の様子、被害を受けた方のけがの写真、私物、亡くなる前の状況などが展示されていました。特によく目についた展示物は、当時の被害の様子を絵にしたものです。どの絵も、被爆された方が数十年後に描いたものでした。梶本さんと同じように、記憶に残る、とても恐ろしい体験だと分かりました。

私があげたこの三つ以外にも、たくさん衝撃的なものがありました。皮膚がただれてしまっている写真や、親と子の文通での最期のやり取りなど、どの資料も、「生きたい」と主張しているように感じました。知識として戦争についてわかっているつもりでも、実際に被害を受けた場所に足を踏み入れると、ただ戦争を知った気になっていただけだと、実感します。日本の

中だけでも、戦争の被害を受けたところは、他にも多くあります。今回行った広島も、戦争の一部に過ぎないかもしれません。ですが、重い内容のものばかりで、全てを受け止めきれないと思います。それでも、これからの人生の中で、少しずつ消化して、より理解ができるようにしたいです。そして、一人でも多くの人に、戦争の恐ろしさを知ってもらい、忘れられることがないようにしたいです。

平和への誓い

松島中学校2年

宮林 愛理

2025年8月6日、私は広島平和記念式典に参加する機会を得ました。それまでは「平和」という言葉を漠然と理解していましたが、この体験を通じて、その意味が私の心に深く刻まれました。広島街を歩く中で私は、「平和」という言葉が単なる抽象的な概念から、痛みと希望が交錯した現実のものへと変わり、私自身の中で強い変化をもたらしました。

式典当日、会場には多くの人々が集まっていました。年齢や国籍も様々で、静かに祈りを捧げるその姿勢に、平和の尊さが伝わってきました。大きな広場に立ち並ぶ人達の目には、それぞれの思いが込められているように感じられました。午前8時15分、原爆が投下された時刻を告げる鐘の音が鳴り響き、会場全体が黙祷を捧げました。時間が止まったかのようなその瞬間、周りにいる人々の思いが一つに重なり、平和への強い願いがひしひしと伝わってきました。その瞬間、私自身も目を閉じ、その時間に身を任せ、心の中で深く祈りを捧げました。今まで「平和」を願ってきた自分が、これほどまでに切実に、心の奥底から平和を求める気持ちを感じたことはありませんでした。

その後、平和記念資料館を訪れ、被爆された方々の遺品や写真、そして体験記を読みました。館内を歩きながら目にしたのは、戦争がもたらした想像を絶する悲劇の数々でした。

遺品の中には、焼け焦げた衣服や、焦げた手紙、そして生きるために戦った人々の涙と苦しみを感ぜられる品々が展示されていました。特に印象的だったのは、佐々木禎子さんが作った折り鶴です。小さな鶴一羽一羽に込められた平和への願い、生きたいという希望が、私の心に強く響きました。禎子さんのお話を知ったとき、その小さな鶴がどれほどの思いを背負っていたのかを考え、胸が締め付けられる思いがしました。彼女が折った鶴の数だけ、平和を願う声があったのだと感じました。禎子さんがこの小さな鶴を作るために抱えた苦しみと、希望に満ちたその瞬間を想像すると、言葉にできないほどの感動を覚えました。

また、被爆者たちの証言の数々は、ただの過去の出来事ではなく、現在もなお核兵器の恐ろしさが生きていることを伝えていく証でした。特に梶本淑子さんの証言です。彼女は自身が被爆した時の恐怖と、その後の心の葛藤について語ってくださいました。梶本さんが語った「核兵器は二度と使用してはならない」という言葉には、強い責任感が込められており、その言葉を受け止めた私は、私たち若い世代がその思いを受け継ぎ、行動しなければならないという使命感が湧き上がりました。彼女の言葉が、私の中で平和の意味をさらに深く問い直させるきっかけとなったのです。

広島での体験を通して、私は「平和とは誰かが与えてくれるものではなく、私たち一人ひとりが守り、紡いでいくものである」と強く感じました。式典の静寂の中で、過去と未来が一つになった瞬間を目撃し、資料館で見た遺品や、梶本さんの証言から、平和はどれほど貴重で、どれほど、守り続けなければならないものかを学びました。また、過去の悲劇を忘れずに語り継いでいくことが重要であるかを改めて認識しました。それは、平和を望む声を届けるため、未来の世代にその重みを伝えるためでもあります。私にとって、この体験は単なる学びではなく、日々の生活で何をすべきかを考えさせられるとても貴重なものでした。

私たちの未来は、私たち一人ひとりの手の中にあります。その責任を果たすために、私は今後も平和を守るための行動を続けていくことを誓います。広島での学びを決して忘れず、日々の生活の中で、出会う人々を大切にし、争いのない社会を作るためにできることを少しずつ実行していきたいと思います。平和を守るための小さな行動が、どれほど大きな影響を与えるかはわかりませんが、私はその一步を踏み出す決意を固めました。

広島を訪れて感じたこと

高綱中学校2年

鶴川 千尋

私が直接広島を訪れて心に残ったことは、大きく三つあります。

一つ目は被爆体験者証言です。被爆者の梶本さんのお話はとても力強く、聞いている私も当時の状況を想像し鳥肌が立ちました。当時の広島には皮膚がドロドロに溶けておばけのようになっている人達や顔が焼け焦げて誰か分からない人達が沢山いたそうです。避難所には亡くなった人達が沢山転がっていて「ごめんね」と言いながらなるべく人を踏まない様に歩いていたそうです。ですが途中からもう感情が無くなり平気で死体を踏めるようになっていたそうです。梶本さんは当時の広島はまさに地獄だったと仰っていました。自分の住んでいる所がそうなったらと考えると私は怖くて悲しくて自分が生きている事が嫌になってしまうだろうと思いました。なので地獄だと思うほど広島は悲惨な状況だったんだと改めて感じる事が出来ました。

二つ目は広島平和記念資料館の見学です。入った瞬間私は息を呑みました。壁には一面に被爆当時の写真やケロイドが広がった男性の背中などとても残酷な写真が貼られていました。また焦げた三輪車などの展示山展示してありました。そのどし物も沢山ありました。中でも印象に残ったのは禎子さんが折った折鶴です。とても小さな折鶴が沢れも細かい所まで丁寧

に折られていて、千という数の鶴を折ったのにも関わらず一つ一つの折鶴に込めた禎子さんの「生きたい。」という思いが強く伝わってきました。そして私は白血病になり苦しい中でも病気に負けまいと鶴を折り続けた禎子さんの精神力はとても凄いものだと思いました。最後まで希望を捨てず進み続けた禎子さんを私は尊敬します。

三つ目はグループディスカッションです。今まで自分の地元が戦時中どの様な状況だったのか知らなかったので今回調べる機会ができてとても勉強になりました。また他県の方達と話す事で一人で調べた時よりも当時の事についてより深く考えられたと思います。地域によって被害の状況は様々だったけど、どこの地域でも大変な思いをしていたのは一緒にやっぱり戦争はひどい事だと改めて感じました。

今回私は広島を訪れて改めて戦争や原爆被害の恐ろしさを感じました。もう二度とこの様な戦争が起こらないように私も積極的に戦争について学んでゆきたいと思いました。私だけが変わっても何も変わらないかもしれないけど出来ないと決めつけて諦めず身近なことから少しずつ変えていきたいです。そして広島で学んだことを周りに伝え恐ろしいこの戦争のことを忘れないようにしたいです。

広島悲劇と平和を願って

菅野中学校2年

丸山 恋

八月六日。私は広島にいました。とても暑く、空は快晴で青空が美しい日でした。そんな広島に八十年前、新型爆弾「原子爆弾」が投下されました。私はこの三日間、広島で何が起きたのか、人にどんな影響があったのか学んできました。

一日目の八月五日。私たちは全国平和学習の集いに参加しました。そこで一番記憶に残っているのは被爆者である梶本さんのお話です。その話の内容は生と死の狭間で本気で、生きぬいたりアルすぎる話でした。その中で梶本さんが日本が負けたことを知って腹が立ったと言っていたとき、私は衝撃を受けました。私は戦争が終わって安心できた、うれしいんだと思うんだと思っていました。ですが梶本さんはすごく腹がたったそうです。なんで今なんだ、もっと早く、一日でも早く終わらせられなかったのか、そう思ったそうです。でもうれしいこともあったそうです。電気をつけて家族みんなで勉強をしたり新聞を読んだりする時間が本当によかったと言っていました。私は話を聞いている間、なんとも言えない感情になり原爆投下はあってはならないものだったと実際に被害にあった方の言葉で聞けてとても良い体験でした。

私はこの三日間の旅の最終日に広島平和記念資料館を訪れました。そこで私は八十年前に

なにがあったのか、どんな被害があったのかを見てきました。一つ一つの展示品を見ていると言いきれない気持ちになりました。当時私と年変わらない子どもが被爆した際着ていた服、食べることができなかったお弁当や小さな子どものお気に入りだった三輪車など心が痛むようなものがありました。

中でも心に、記憶に残っているものがあります。まずは本人が残した遺品です。本当にいろいろな物がありました。看病中に使っていたまくらや大切にとってあった洋服、万年筆など、残っているものは様々でした。ですがその一つ一つの物からたくさんの思いを感じました。とても見ているのが辛かったです。まだ幼かった子の生きていた証を見ているとなんでこの子は死んでしまったんだろう、まだ未来はあったはずなのに。そう考えると涙が出そうになります。とてもとても悲しかったです。そして怒りも覚えました。

放射線による被害についても展示されていました。原爆症と呼ばれる被害によって大勢の人が亡くなったそうです。その中の一つの「ケロイド」は実物が展示されていました。そしてケロイドになってしまった兵士の写真もありました。そして原爆の影響で黒い斑点が出てしまった方の写真もありました。原爆は数えきれないほど多くの人々に被害を与えていたので

す。

資料館を見終えた後、原爆の恐ろしさを全身で感じました。自分より全然若くこれから明るい未来が待っていたような子どもや中学生が無差別に亡くなっていく、その様子を写真や言葉、絵で感じる。今までに感じたことのない悲しみ、恐怖に襲われました。

私はこの三日間、平和と向き合いたくさん学びました。原爆投下から八十年。戦争を経験した人が減っている中、戦争を風化させてしまわないために、今の私達が知り、伝えることが大切だと思います。そしてこれ以上、原爆によって被害がでることが決してないように戦争の被害や悲しみを知り一人一人思いやりを持つことが大事だと考えました。

時を越えて届く声

筑摩野中学校2年

小笠原 心南

私たちは五日から七日の三日間を使って被爆地の広島県に行きました。

広島に到着した五日、私たちは被爆体験講話で当時十四歳だった梶本さんの貴重なお話をきけました。梶本さんは被爆し、建物の下敷きになっていてうではたくさんのガラス片が刺さっていて激しい痛みにおそわれていたそうです。友達が生きていたことで、助け合っ大芝公園に行くと、たくさんの人がいて地獄としか思えなかったそうです。しばらくたって死体を見ても梶本さんはなんとも思わなくなりました。すごく苦しくて辛かったことが伝わり、私は、そのときに戦争の現実を突きつけられました。梶本さんは最後に、「多くの人に戦争の事を伝えなければ」と言っていました。だから私は、梶本さんが私たちに話してくれたことを、多くの人に知ってもらえるように、しっかりと伝えていきたいと思っています。

七日、最終日に広島平和記念資料館に行きました。私は画像でしか原爆の事を知らなくて、資料館は私が知っていることよりも鮮明に書いてありました。

最初は、原爆後の広島をみたときはありえないと思いました。たった一つの爆弾でほとんどの建物がなくなります。その先にすすむと被爆したたくさんの人たちの写真を見ました。食べてもらえなかったお弁当箱。私が、悲しく思え

たのは被爆し、けがをした人達の写真です。必死に逃げてきたのに、歯茎から血が出たり、亡くなる数時間前に斑点が出ていたり、苦しむ方が多かったです。戦争がおわり、人々が前を向こうとしていたとき、被爆者の体に変化があり、多くの人が嘔吐、吐血とたくさんの症状が出てきました。このせいで差別にあった人もいます。そのあとでも孫、娘に遺伝しないかと不安になったそうです。

原爆は、落とされたときから多くの人を長く不安や悲しみ、痛みで苦しめ満たされました。そして今、核爆弾を所持している国は数多くあります。その国たちすべてではないけれど戦争を起こし、苦しめています。唯一の被爆国である日本国が声を上げ、核爆弾の所持を少しでも減らすように呼びかけ、日本国以外に被爆国ができないために世界がたくさんの平和で満たされるといいなと思います。

まだ小さい私たちにはできないことが多くあります。でも私は、広島で見てきたことをそのままひとりでも多くの人にはなし、戦争の悲惨さを伝えていきたいです。

平和への第一歩は

山辺中学校2年
澤渡 千月

私は戦後八十周年という節目の年に松本市の代表として三日間広島を訪問してきました。初めての広島で特に心に残っていることは3つあります。

一つ目は平和記念式典への参加です。まず最初に外国の方がすごく多く参列していることにおどろきました。テレビなどで毎年多くの国や地域から色々な方が参列しているということは知っていましたが想像以上でした。たくさんの方のあいさつを聞いて思ったのは国や立場がちがったとしても平和への願いはみんな変わらないということです。それと同時に核兵器とは平和と対極にある物ということです。

二つ目は原爆ドーム見学です。実際に近くで見ると何か遠い存在に感じていた原子爆弾が一気に近いものに感じました。その一帯はまるで八十年前のまま時間が止まっているようでした。原爆ドームのまわりではいろいろな方が戦争について思ったことを発信していたり、体験談を話している方、そしてその話を真剣に聞く外国の方。そんな人々であふれていました。

三つ目は平和記念資料館です。2時間だけでは全て見きれないほどのたくさんの資料がありました。そこには教科書にのることのできないような、思わず目をそらしたくなるような真実がそこにはありました。展示品の中には原形をとどめていないものや、まがった鉄のとび

ら、黒い雨の跡が残った白い壁など一つ一つがとてもキレイに残っていて、その日、その場にいたわけでもないのにすごくショックを受けました。そのくらい今では想像もできないようなことが起こっていたのです。

この三つのことを学んで第二次世界大戦中、全国各地で被害があったということをもう一度確認し、平和のために何ができるのかを考えました。そして私は平和への第一歩はまず知ること、そして興味をもつことだと思いました。

八十年前の人々の身に八月六日何がおこったのかをたくさん知り、いろいろな経験をした今、平和についての見方や考え方、すべてが変わったような気がします。今もとだえることのない戦争に紛争、何一つ罪のない人々の身が命の危険、生活の危険にさらされているのが今の世界です。以前は自分には関わりのない遠いもののように感じていたはずのものが一気に近くなったように思えて恐ろしく感じます。私はこの短い三日という期間でここでは伝えきれないほどの多くの学びがありました。実際に被爆した方も少なく、戦争を知るその時を生きた方々も減少している今発信することが大切だと思いました。このことを深く知った今、身近な人に対する小さな優しさから思いやりの輪を広げて、世界平和への第一歩をみんなとふみ出していきたいと思います。

ヒロシマの街を焼け野原にした一発の核兵器

開成中学校2年

本橋 侑弦

一九四五年八月六日、今から約八十年前、ヒロシマに核兵器の一つである原子爆弾が落とされ、あの日までは変わらなかったヒロシマが一瞬にして地獄に変わったと被爆体験者の梶本淑子さんは言っていました。

梶本さんは当時十四歳の時に、爆心地から二、三kmで戦争のために軍需工場で軍事用の飛行機を作っていたらしいです。あの時、正面の窓から真っ青な光が流れたのを見て反射的に機械の下に潜り込んだ瞬間、爆発音がし、地面が盛り上がり自分の体が宙に浮き気絶してしまったそうです。気がつくと、辺りが真っ暗だったらしく、友人とがれきを脱出し右腕にガラス片が刺さり、出血しながらも避難し始めたと言いました。避難中に見た爆心地の近くから歩いてきた人たちは、体が真っ黒で両手の皮膚が垂れ下がっていたようで、この世の生き物ではないお化けだと思ったそうです。

このような、聞くだけでとても恐ろしく、鳥肌がたつ出来事を実際に体験されたというのは、想像を絶する恐怖があったのだろうと自分には感じられました。

今、原爆の恐ろしさが分かる建物として原爆ドームが有名です。原爆ドームは元々、広島県産品の展示や販売を行っていたところでした。また、現在原爆ドームはユネスコ世界遺産に登録されています。

他にも、平和記念資料館で見た写真や絵もとても恐ろしかったです。

自分は今まで原爆の後遺症といっても、そんな大したことではないのだろうと思っていましたが、全身に酷いやけどを負ってしまった人や、背中に赤く盛り上がった組織ができるケロイドができてしまった人など、被害は様々でした。このような人たちは、肉体的な苦痛を味わいますが、見た目で相手に差別されてしまい精神的な苦痛を味わうこともあるそうです。

僕は原爆投下直後に死亡してしまう人や、被爆によって体が不自由になってしまったり、差別されてしまう人などをなくすために、核兵器廃絶は実現しなければなりません。なので、世界中にいる一人一人が原爆の悲惨さを知り、二度と繰り返さないことを意識することが今、私達に必要なことではないのでしょうか。

広島平和記念式典に参加して変化した僕の思い

女鳥羽中学校2年

細野 琉斗

一九四五年八月六日午前八時十五分に一つの原子爆弾でにぎやかな都市が一瞬で恐怖と絶望の都市に変わりました。僕はその原爆が落ちた広島に2泊3日で訪れました。町はビルがたくさんあってにぎやかでした。僕は、被爆者の思い、原爆について、そして平和について考えられた3日間だと思います。

そして、僕がこの3日間で体験した事、心に残った事を3つ紹介します。

1つ目は、被爆者の体験講話です。被爆者の梶本淑子さんは当時、中学3年生でした。梶本さんは、爆心地から二、三キロメートル離れた飛行機のプロペラを作る工場で作業中に被爆しました。梶本さんは、反射的に機械の下に潜り込みました。ですが、右腕を負傷して、建物の下敷きになってしまいました。でも、友人と一っしょにがんばって脱出できました。ですが、外は建物が全て倒壊し、梶本さんの友人の多くはけがをしていて自力で動けなかったそうです。また、梶本さんたちが避難している時に、他にも避難してくる人がいました。梶本さんは「人々の髪は逆立ち体は真っ黒で両手の皮ふが垂れ下がっていてまるで、地獄の光景だ」とおっしゃっていました。僕は、聞いていてすごくつらいし、梶本さんも、嫌な記憶を思い出して話すのはすごくつらいだろうなあと思いました。

2つ目は、江田島旧海軍兵学校の見学です。旧海軍兵学校には日露戦争で活躍した東郷平八郎の胸像がありました。また、海軍の大將の写真や中將の写真や当時の写真が展示されていました。でも、その中で心に残ったのは特攻

隊の方が書いた遺書です。特攻隊の遺書の他には、写真があり、その人の年齢や名前が書いてありました。中には、十九歳の方の遺書や写真がありました。そのような若い人の気持ちを考えるとすごくつらいです。

3つ目は、平和記念資料館です。平和記念資料館には、被爆した町の写真、被爆して亡くなった人の遺品、被爆した人の写真などが展示されていました。その中に、今の広島とは思えない地獄のような絵がありました。僕が心の中に残っているのは、被爆してこげた三輪車と学生服です。三輪車を使っていた子供は楽しく遊んでいた時に被爆して亡くなりました。遊んでいた時に亡くなった子供の気持ちを考えるとかわいそうだなあと思いました。学生が着用していた服装の内、帽子とベルトは津田さんの遺品から、ゲートルは上田さんの遺品から、学生服は福岡さんの遺品から集めて展示したそうです。この三人は、おそらくいつもの時間に登校していた途中で被爆してしまったと思います。この三人の気持ちを考えるとかわいそうだと思います。

僕は改めて平和について学びました。僕が三日間広島を訪れて思ったのが「この時代に生まれてよかったなあ」、「僕らは恵まれているなあ」と思いました。僕はこの三日間で体験したこと、感じたことを一人でも多くの人に伝えていきたいし、忘れないようにしたいと思います。

戦後80年の区切りで

明善中学校2年

加藤 優真

「この世とは思えない地獄の光景だった」この言葉は被爆者の梶本淑子さんの言葉で、今回、参加した平和学習で、一番、印象に残っている言葉です。

1945年8月6日、原爆が落ち、中心部は数千度になり、爆心地から離れていた梶本さんはプロペラを作る作業中に被爆しました。建物の下敷きとなった梶本さんは、屋外へ出て重傷者を助けている時に、髪は逆立ち、裸の体は真っ黒で、男女も分からなかった人を見ました。重傷者を公園に運んでいるときにたくさんの死んだ人をたくさんふんで最終的にはなんにも感じなくなったそうです。14歳は私とほとんど同年齢で、普段通りに生活していて、突然、原爆が落ち、無差別に人を殺して、梶本さんの言葉のように、地獄の光景だったということ、すぐには、信じられませんでした。

広島平和記念式典は、とても暑く、日差しがとても強い中で行われました。

8時15分、80年前の今、たった1発の原子爆弾で、たくさんの人が亡くなり、自分の立っている場所で、80年前には、ここで亡くなっている人がいたかもしれないということを思い、今、亡くなった人の上に立っていると考えました。

式典の後に行った、原爆ドームでは、周りのビルとは、雰囲気がちがっていて、そこだけ時間が止まっているようで、原爆の恐ろしさ、悲惨さを、見て、感じました。

旧江田島海軍兵学校では、特攻隊員の遺書や、海軍将校らの遺品などがあり、命の尊さ、戦争の悲惨さなど、いろいろなことを深く考えました。

そして、広島平和記念資料館では、亡くなった人の、時計や服、生活用品などの遺品がたくさんあり、どれも、すごい印象的でした。その中でも、とくに印象に残っているものがあります。それは、鉄などが溶けて、残されたものです。鉄が溶ける温度が1500度で、それが一瞬にして溶けて、人間などすぐに殺してしまう恐ろしい兵器だと思いました。原爆の後遺症で亡くなった人の遺品もたくさんありました。黒いつめ、はがれた皮ふ、死の斑点が出た人の写真、私は、原爆で、亡くなった人も原爆が落ち、原爆の後遺症で亡くなった人も、とてもつらく、苦しい思いをしたと思いました。

最後に、戦後80年という区切りの年で、80年前の惨劇を、ウクライナやガザ地区で繰り返さないようにするために、私は、話し合いや、伝えることが大切だと、今回の広島平和記念学習で、改めて感じました。そしてこのような言葉があります。「今日の聞き手は明日の語り手。」私はこの言葉のように、今回の広島平和記念学習で学んだこと、お聞きしたこと、そのほかにも、戦争の悲惨さ、命の尊さなどでいろいろなことを次は自分がそっせんして、伝えていきたいです。

平和な世界を願い、

信明中学校2年

上山 智実

今から80年前の1945年8月6日午前8時15分に広島に投下された原爆は、地上600メートルの上空でさく裂し、真っ青な光がパァーと流れました。そこにいた人達は、両手の皮膚が爪まで垂れ下がり、その皮膚が衣類につかないように手を前に出している姿は、まるでおばけのようで、この世とは思えないほどの地獄絵図だったと、被爆者の梶本淑子さんが語られました。梶本さんは、建物の下敷きになっていましたが、友人に助けられ、さらに梶本さんも下敷きになった友人を助け、死体があふれた道を、謝りながら死体を踏み、避難したそうです。無差別に多くの人の命や生活、心を奪う原爆は、あってはならないものです。

私は、2025年8月5～7日の3日間、松本市広島平和記念式典参加事業に参加させていただき、戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさを学びました。

原爆により身体にやけどを負い、乾いたのどを潤すため、空に向かって大きな口を開き、放射能を帯びている黒い雨を飲もうとしている絵と、「あつくて あつくて からだ中が 火のかたまりのように なっていたから 水がほしかったのです」という詩は、私が、手術のためたった1日水を絶った時に経験した渇きを呼びおこしました。体が水を欲し、泣きたくても涙がでなかった苦しみ。被爆者に、終わりがみえない苦しみと痛みが続いたことを想像し、とてつもない恐怖におそわれました。また、放射線の中、痛みと苦しみに耐え、子が親を探し親は子を探し亡くなっていき、生き延びたとしても、探したときに浴びた大量の放射線により原爆症に悩まされ、数年の内に亡くなる人が多くいたこと。ぼろぼろに破れ、血で汚れ、放

射線による黒い雨の痕が残った子供や大人の服や、全身が火傷で覆われた人や傷を負った子供の写真を見たときには、人々の痛みや苦しみが伝わってきて、悲しみと恐れ、怒りで心が乱れました。

私は考えます。日本はなぜもっと早く降伏できなかったのだろうか。アメリカは原爆を落とす必要があったのだろうか。アメリカが、原爆を落としたことは大きな過ちであり、日本の歴史に、今もなお残っている深い傷跡であり、決して必要悪ではないと、私は考えます。無差別に人を殺す核兵器は廃絶すべきです。私たちは、この傷跡を世界に伝え、「平和」を訴えていく責務があります。世界では、今も国同士の争いが起こり、悲しみが生まれています。武力ではなく話し合いでその原因をつきとめ、解決するための橋渡しを日本がするべきだと思います。

私は広島を訪れて、今まで経験したことがない多くのことを知り、考える機会をいただきました。戦後80年、原爆を体験した人が少なくなり、戦争の記憶が風化し、平和への意識が薄れてきています。私はこれから、今回学んだ原爆の悲惨さを、私たち戦争を体験していない世代に伝え、平和のむろさ、「平和」とは私たちが日々意識し、大切に育んでいくべきことであり、決して当たり前のものではないことを伝えていきたいです。

私は、核兵器のない平和な世界を願わずにはいられません。どうかみなさん。世界が平和へと進んでいくためにも、毎日少しでも良いので、平和を願い、平和について語り合いましょう。

「80年たって」

会田中学校2年
横内 日和

1945年8月6日午前8時15分たった一つの爆弾で、広島的生活、景色が一気に変わりました。

私は、原爆が投下して80年後の広島に行てきました。被爆者の梶本淑子さんに当時のお話を聞きました。原爆が落ちる前までは、爆心地から2.3キロメートル離れた労働力として、飛行機を作る作業をしていたそうです。いつも通り生活していたのに、いきなり窓に真っ青な光が流れて、梶本さんは恐怖に襲われたと思いました。作業場の下敷きになってしまっているときに、友達が「明かりが見える」と、言て本当は明かりが見えなかったけど、その言葉は勇気になったと言ていました。私は、小学生の時ガラスで足を切ったことがあります。そこで梶本さんが窓ガラスの破片が右腕にたくさん刺さって、針を刺されるようなずきずきした痛みだったと言ていて、私が足を切ったときも耐えきれないぐらいの痛みに襲われていたので、ずっとたくさんのガラスの破片が刺さっていた梶本さんも、すごい激痛に襲われていたと思います。梶本さんがみんなに大切にしてほしいことは、人々に優しさを大切にしてほしい。たくさんの人と仲良くしてほしい。人を大切にしてほしい。この3つのことは私生活からできることなので私は意識して生活をしていきたいと思いました。梶本さんの話を聞いて、本当に原爆が落ちたということが実感できました。梶本さんは最後に、もっと前の日に戦争をやめていればたくさんの人が助かったの

にと、言ていました。日本は、1945年8月15日に戦争をやめたとラジオで発表されたけど、もっと早く終わってれば、広島にも原爆が落ちず、もっと多くの人はまだ生きていたのかもしれない話を聞いて思いました。

原爆資料館では、当時着ていた服が破れていたり体中にやけどを負った人の写真や原爆の落とされた後の広島の写真などあったりました。私はそれを見て、たった一つの爆弾で、住んでいた場所の景色も自分の姿も変わっていることが分かり原爆は怖いものだと思います。

いつも通り普通の生活ができることが当たり前ではないことを知りました。この原爆のことは絶対に忘れてはいけないと思います。

広島にいたこの3日間を通して、私はたくさんのかことを学べました。教科書などから見ると、実際に被爆者の方の話を聞いたり、広島原爆ドームや、原爆資料館で実物を見たりするのは原爆の恐ろしさが全く違いました。原爆を実際に体験した被爆者の方は、亡くなってきています。今回話を聞いたのも本当に貴重だと思っています。まだ原爆のかことを全然知らない人などに原爆の恐ろしさを、伝えていきたいです。

私は、今生きていることが当たり前ではないということが分かりました。原爆が落ちた日も生きたくても生きられなかった人も多数いました。しっかり1日1日を大切に、これから自分に何ができるかを考えていきたいです。

平和な日々を守るためには

安曇中学校2年

太田 美言

松本駅で出迎えてくれた母の顔を見たとき「私は幸せだな」と思った。八月五日～七日の三日間、広島平和記念式典参加事業に参加させていただいた。三日間とても充実した時間であり、学ぶことがたくさんあったが、一番心に残ったのは「平和とは当たり前のことではない」という事実である。

一日目に参加した「平和学習の集い」では被爆体験をした梶本さんのお話を聞いた。一番下の弟が高校生になるまで頑張ろう、と自分に言い聞かせて過ごした戦時中。そして戦争が終わったときに梶本さんは「こんなに簡単にやめられるならばもっと早くやめてほしかった」と感じた、とおっしゃっていた。なぜなら戦争が終わった前日に梶本さんの大切な方が亡くなったからだ。寿命ではなく戦争のために亡くなった方がたくさんいて、その方たちを大切に思い、愛情を注いでいた人々がどれだけ傷ついてきたのだろう。今もその傷は深く残っている。戦争の残酷さをあらためて実感した。

二日目の平和記念式典では、梶本さんの話を聞いた後だったので平和について語る言葉の一つ一つが胸に響いた。献花の作法一つとっても、亡くなった方への気持ちをこめた大切な作法だと感じられた。

旧海軍兵学校で見た遺書、平和記念資料館で見た遺品や写真、絵の数々も忘れることができ

ない。遺書には家族を思うたくさんの言葉が書かれていた。また原爆でやけどを負った小さな子の写真からは、今もなお残る戦争の痛みが感じられた。戦争をドラマやアニメでしか見たことがなかった私だが、「戦争の残酷さ」「平和の尊さ」をリアルに実感した。

「行ってくるよ」が最後の言葉となって戦争に行き、命を落とした人がいた。もし自分がその立場だったら、と考えると胸が痛くなる。私は広島へ行くときに「行ってきます」と笑顔で家族に手を振り、松本駅で笑顔の母に出迎えてもらった。それが当たり前ではなかった戦争中の人々の気持ちを考え、「私は幸せだ」と感じると同時に胸が苦しくなった。

広島訪問を通して「平和とは何か」を私なりに考えた。参加した仲間たちとグループディスカッションを行い「平和ではない状況を解決するには」というテーマで話し合いをした。その時に、自分一人の力では何もできないけれど、多くの人に平和の大切さを伝え、一緒に考えれば、何かが変わり平和を維持できるのではないか、と思った。

この三日間で学んだことをこれからも深めていき、平和の尊さをより多くの人に伝え、より多くの人に理解してもらえるために私のできることを考えていきたいと思った。

衝撃を受けた三日間

梓川中学校2年
三枝 光宇

私は8月5日・6日・7日の三日間で、広島に落ちた核兵器の悲惨さについて学びました。

一日目には全国平和学習の集いで、被爆体験者梶本淑子さんのお話と平和についてのグループディスカッションをしました。被爆体験者の淑子さんは原爆が落ちた時の様子やその恐ろしさについて話してくださいました。中でも私が印象に残っている言葉は「腹が立った」の一言です。淑子さんは被爆してから九日目の八月十五日（終戦の日）に戦争が終わったと聞いて喜んだのではなく腹が立ったと言っていました。もう戦争に負けそうだったのにも関わらず、日本は出来る限り戦争を伸ばし、たくさんの死者を出した、そのことが淑子さんはたまらなく悔しかったそうです。私がその一言の本当の意味を知るのはこの後のグループディスカッションや二日目、三日目を通してでした。

グループディスカッションでは、他の県からの方々が集まって六人で話し合いをしました。話し合いのテーマの一つ目は「あなたの地元では第二次世界大戦中にどのような被害を受けましたか」でした。この話し合いでは、たくさんの県で被害を受けていることが分かりました。テーマの二つ目は「今、平和でない状態とはどのようなことがありますか。また、それはどうしたら解決できると思いますか」です。今、平和でない状態は世の中にたくさんあります。

幸い日本は平和な状態が続いていますが、外国では今でも戦争が絶えません。そんな中での決定的な解決法はないのかもしれない、というのが話し合いの中で出ました。ですが、解決のために少しでもできることはあります。戦うための兵器を少しずつでも減らしてみるなど、戦争の恐ろしさをたくさんの人に知ってもらうなどの争いを起こす動機や環境を作らないようにすることが一つの方法ではないかと結論付けました。この話し合いは日常生活にも役立つと思うのでこの先も利用できたらなと思っています。

二日目は平和記念式典の参加と原爆ドームや江田島旧海軍兵学校の見学をしました。

平和記念式典では、会場内でとても緊張した空気が流れていてテレビで見た雰囲気とは全く別のものでした。参加者一人一人が集中して話を聞き戦争と向き合っていました。

次に原爆ドームを見学しました。原爆ドームは思ったよりも大きくボロボロの状態でした。その状態から思ったことは、「二度と戦争はしてはいけない」の一つでした。核兵器一つである状態にまでなると考えると、とても恐ろしいです。また、近くにあった川が死体でいっぱいになったと考えると、どれだけの死体の量だったのか想像が付きませんでした。

原爆ドームを見学した後は江田島旧海軍兵

学校の見学に行きました。海軍兵学校では戦争のために育成された兵士など、使った船や武器など戦争に関わりのある細かいことを学びました。兵士たちはとても厳しい訓練をしており勉強も難しかったそうです。そんな厳しい環境でも生き延びていくことが大事だったそうです。もし、私が兵士だったとしたらそんな環境には耐えられないなと思いました。

三日目は広島平和記念資料館の見学です。資料館では遺品をはじめとする資料や被爆の惨状を示す写真が展示されていました。中でも衝撃的だったものが二つあります。一つ目は被爆してしまった人の状態です。黒い斑点が身体中にあり、放射線を浴びただけでここまでになってしまうのかと驚きました。二つ目は黒く焦げた弁当箱です。中身のお米と弁当箱が一瞬にして焼けて真っ黒くなってしまい共にそれを食べようとしていた人の人生も黒く焼けてしまったと考えると重い気持ちになりました。資料館にはこの二つ以外にも原爆の恐ろしさを伝えるたくさんの資料があり、なぜ戦争をしてはいけないのか改めて知ることができました。

なぜ戦争をしてはいけないのか、それは関係のない人まで巻き込んでたくさんの死者を出し八十年たった今でも苦しんでいる人がいるからです。今後戦争を起こさないためにも私達一人一人が戦争に向き合い、1945年8月6日に落ちた核兵器によって何が起きたのかを少しでも多くの人に見て、知り、実感してほしいと思っています。そしていつかは戦争がなく

なり、誰もが安心して生活できる平和な毎日を実現させたいです。

広島の惨状と希望

波田中学校2年

和田 真

僕が初めて訪れたビルが並ぶこの広島の街が、八十年前焼け野原だった事が想像もつきませんでした。

原爆という一つの兵器によって当たり前が続くと思っていた「日常」がうばわれました。被爆者の梶本さんの話では、爆発音と同時に内臓がえぐられるような痛みを感じ、体が宙に浮いたそうです。友達は腕に穴があき、骨がとびでていた。倒壊した建物から出てきた人はみんなたてず、手が逆を向いていた。手を前に出し、垂れ下がった皮ふはおばけのようで、ただれて目が見えず、どろどろで女か子供か分からない。もう死んでしまっているのに赤ちゃんを抱く母親。この地獄のような状況が広島で起きたまぎれもない「事実」であり、それを人間がやったことが信じられませんでした。広島で一番大きい公園、七つもある川が全て人でうめつくされ、公園にはぬるぬるとした人の皮をふんでしまうほどで、「助けて」という声がとびかっていたそうです。しかし梶本さんは死体をみても何の感情もなくなってしまったといいます。そんなきゅう地にたつほど人を追いつめた原爆は、たくさんの心の傷もつくってしまったと僕は思いました。資料館では、原爆の惨状を表すものがたくさんあり、特に川に浮いている遺体を引き上げるために使ったとび口が印象に残りました。引き上げた人の気持ちを考えると

とても辛くなるし、川にとびこんでも亡くなってしまった人達はやっとの事で水があったのに遺体がもののように扱われてしまったのはとてもいたたまれない気持ちになりました。他にも、絵は写実的なものではないのに一目でわかる恐ろしさを表していて、特に原爆が落ちた後に降る放射能を含んだ黒い雨でのどを潤す絵は、飢えに勝てず、放射能を含んでいるとは知らず、放射能に蝕まれてしまった人の苦しみが描かれていました。他にも放射能の影響とは知らず亡くなってしまった人達がたくさんいたことも知りました。しかしそのような中でも希望を感じられるものもありました。娘を抱き喜ぶ家族の写真です。ケロイドの治療をする病院で出会い結婚し、子供が生まれたそうです。戦争や原爆があった中で、この希望が人々を支えたのだと思いました。

梶本さんの話の中で戦争中は国の命令で中学生も働き、梶本さんは飛行機のプロペラをつくる作業をしていたそうです。僕は、昔は特に「女の人は家庭にいる」という考えがあったと思っていたので女性までもがそんな作業をさせられていたのかとびっくりしました。また、「この戦争は正しい」と教えられていたそうで、男子は兵隊に、女子は看護婦になりたいとみんなの国のためにと、戦争はにぎわっていたそうです。だから、反対した人は非国民とされ、

ひどい拷問を受けさせられていたと聞き、悲しくなり、そんなことをする当時の日本が怖くなりました。そして江田島旧海軍兵学校で見た資料では、特攻隊はほぼ十七歳から二十五歳だということを知りました。まだ若い年齢だから「帰って来られない」「家族に会えない」という不安を抱えたと思うと、どれだけの覚悟をもって特攻をしたのかと思うと、胸を締めつけられる思いと同時に、先ほどの梶本さんのように、大人がいいというわけではないけど、未来のある若者を戦争に利用する当時の政府に憤りを覚えました。

原爆が投下された広島を、米国科学者は「七十五年草木も生えぬ」と言ったそうです。しかし、広島は復興を果たし、空襲があった地域も復興しています。戦後、原爆投下後八十年が経った今こうしてビルが建っているのは、人々に希望があったからだと思います。大切な人がいたから、その人のために生きることができたのだと思います。被爆者の心の傷は治りません。しかし、この傷が今無くなろうとしています。その傷はなくしてはいけません。これを受け継ぎ、語り継いでいくことが僕たちの役目であると思いました。

「広島に行って思ったこと」

鉢盛中学校2年

網野 晴琉

広島市に着いたとき、以前テレビで見た、原爆が落とされたときの風景と違い、とても繁栄していると思いました。あの日原爆が投下され、この町の人々からすべてを奪ったと僕は思います。家族、家、食べ物などすべて奪ったのです。この事実を今回の平和記念式典参加事業で知りました。

僕は、この事業に参加できてよかったと思います。なぜなら、被爆した方の話を直接聞くことができたからです。聞いた話で一番心に残っているのは、「なぜ戦争が終わるのが今日だったのか」という話です。これだけを聞くと意味が分からないかもしれませんが、この意味は「なぜ、戦争が終わるのが、昨日でも一昨日でもなく、今日だったのか」ということです。確かに、どうせ負けるなら、できるだけ早く負けを認めてくれればよかったのに。たった何日か早く戦争をやめるだけで何千から何万もの人々が死なないで済んだのです。この話を聞いて本当にそのとおりだなと思いました。

自分で調べたことの中には、ラジオで終戦の言葉を聞いた後で特攻機が次々と基地から空へ飛んでいったという話があります。理由は、自分の国が負けてしまい、それに絶望したり責任を感じたりして海に自ら墜落し、自殺しようとしたそうです。

そういう話もそうですが、本当に戦争はおろかで、絶対にしてはいけないことだと改めて感

じました。

今回の事業では、平和記念公園にある平和記念資料館にも行きました。そこには実際に被爆した人の写真や、被爆した人のお弁当、水筒、帽子などの物、原爆が落とされた当時を再現した絵などが展示されていました。写真も絵も少し怖いもので、お弁当などの物は、そのもの自体は怖くないのに、それを使っていた人がいた、そしてその人はもう生きていない、などとそのことを考えると怖いと思いました。

被爆した方の話を映像で見ても「肌が焼けるように痛かった」「家族を探しながら何もない街をさまよった」などと、とても心が苦しくなりました。さらに原爆は、広島と長崎に落とされましたが、それぞれ種類が違い、アメリカは実験のためという理由で罪のない人々の命を一瞬で奪ったのです。

この事実を何度も聞いて思ったことは、これを「風化」させてはいけないということです。この原爆投下を実際に体験したり見た人は、年々少なくなっています。なのでこれからは、実際に僕が見たり聞いたりしたことを「こんなことがあった。」「二度と繰り返してはいけない。」というように、いろいろな人に話し、繋いでいこうと思います。

僕にとって平和とは、争いによって悲しむ人がいないことです。そんな世界になるように自分にできることを考えていきたいです。

記憶を繋ぐために

信大附属松本中学校2年

鬼頭 岳暁

今から80年前、1945年8月6日、一発の原子爆弾により広島市の爆心地から半径2km以内が壊滅した。その爆弾には、ウラン235というものが詰め込まれていた。その爆弾は原子の核分裂を利用した爆弾であった。当時14歳であった梶本淑子さんは2025年8月6日現在94歳になる今もなお、被爆体験を僕たちに伝えてくれている。この日は被爆した梶本さんの話が直接聞けるととても貴重な体験だった。

梶本さんは爆発後、自分が働いているプロペラを作る工場が倒壊し、家屋の下敷きになっていた。友達に助けてもらい、なんとか脱出したが、足から大出血した。大けがをしながらも、友達と協力して他の家の下敷きとなっている人たちを助けた。梶本さんが爆発後に見た光景は、地獄のようであったという。全身が赤くなって髪はぼさぼさ、皮膚は垂れてまるでジャガイモの皮を付けているよう。一日二日たって死体の火葬が始まったころには街に魚が腐ったような悪臭が漂い始めた。その時には、体に悪臭がついて水さえ飲む気になれなかったという。僕はこの話を聞いたときに衝撃を受けた。水さえ飲む気にならないとは。皮膚が垂れてビロビロになっているとは。その地に立っていなかった僕にとっては想像しがたい光景だった。

原子爆弾の恐ろしさや当時の人たちの葛藤が実感できる場所が、広島平和記念資料館である。原爆によってねじ曲がった鉄骨、溶けたガラスが当時のまま保存されている。原子爆弾では強烈な熱線と爆風のほかに、「放射能」というものが生き残った多くの人たちに襲い掛かった。放射能の例を挙げると「ガンマー線」というものがあるそうで、ガンマー線は何十メートルものコンクリートの壁さえ通り抜け、中にいる人の大半を即死させるほどのDNA破壊力があるそうだ。それにより、原子爆弾が投下された後に生き残った人も放射能により多くの人が「原爆症」という病気にかかり、苦しんだり亡くなったりした。資料館を訪れるのは2年ぶり2回目になるが、2年前には感じることはできなかった色々なことを考えてみることはできるようになった。2年前は、初めて原子爆弾による被害を目にしたのでただただ恐怖しかなかったが、今回は、原子爆弾の実態や被害を学んだ後に行ったので、こんなことは二度と起こしてはならないと強く思うようになった。大やけどを負った人たちの救護の為、全国各地から多くの人が広島へ集まったことも、今回初めて知った。その人たちがどんなに必死に作業をしたことか。その人たちの努力もむなしく亡くなった多くの人たち。満足な治療も受けられず母親の腕の中で死んでいく赤ん坊。何と

か一命をとりとめた人でもその後の放射能により白血病、大量出血、がん。実際に体験していない僕にとっては想像できる範囲をはるかに超えたものであることに衝撃を受けた。また、原爆に遭っているという理由から、結婚を反対されたりいじめや差別を受けたり、原爆による怪我と、いじめや差別による精神的なダメージが被爆者を二重に苦しめた。

今、全世界には人類を何回も滅亡させられるほどの大量の核兵器がある。今なお戦争が続いている国では毎日のように爆弾が落ちている。核兵器はとても恐ろしいものである。ただ、戦争をしていれば核兵器が使用されなくても亡くなる人たちがいる。どうしたら、戦争が地球からなくなり、平和な世の中が実現するのだろうか。

僕にできることは、今回、被爆した方から直接聞くことができた話を、一人でも多くの人に伝えていくこと、そして、どうしたら戦争のない世の中がつかれるのか、考え続けることだ。世界中の人に、広島平和記念資料館を訪れて欲しい。戦争はとても恐ろしい、核兵器は絶対に使用してはならないということに共感する人が増えれば、平和な世の中に繋がるのではないかなと思う。

ヒロシマの想い

才教学園中学校2年

西村 綾乃

昭和二十年、八月六日、午前八時十五分。青白い光が目の前に映り、大きな爆発音と共に一瞬にして街は吹き飛んでしまった。辺りを見渡すとそこら中に遺体が転がっており、四千度という高熱により皮膚が垂れ、全身が焼かれて赤く染まりたくさんの人が水を求め歩いていた。まさに地獄絵図。恐怖だった、感情がなくなっていたと被爆者の方々は語っています。

私はこの夏、広島平和記念式典に参加させていただきました。実際に広島へ訪れ、たくさんのことを学びました。その中で二つの体験がとても強く印象に残っており、戦争のことについて深く考えさせられました。

一つ目は、被爆者の梶本淑子さんの話です。梶本さんは当時十四歳で爆心地から二、三キロメートル離れた軍需工場で飛行機のプロペラを作る作業中に被爆しました。梶本さんの話の中で何回も“痛い、怖い、恐ろしい”という言葉が出てきており、その度に私は胸が締め付けられました。また梶本さんは戦争が終わったと聞いたとき腹が立ったと話していました。何でもっと早く止めなかったのかと。私はその話を聞いて終戦という言葉の意味の捉え方が変わりました。みんながみんな終戦という言葉に喜びを持っていたわけではなく悲しみ、怒りなど様々な感情が心の中で飛び交っていたのかなと思いました。

二つ目は、広島平和記念資料館に展示された資料や写真です。資料館には原爆直後の広島の写真がたくさんありました。そこで私は一生忘れることのない写真を目にしました。全身を大火傷した少年。放射線の影響で髪が抜け赤紫色の死の斑点と呼ばれた血の溜まりが全身にある人。被爆した多くの人々が苦しんで生活している写真。写真から目をそらすことができないほど残酷で、とても胸に響きました。

いま被爆者の方々は核廃止を訴え、ヒロシマを次の世代へと語り継ぐ活動をしています。戦後、核兵器禁止条約、核兵器不拡散条約など他国も核撤廃に努めてきました。しかし、今も約一万発以上の核が保有されており、抑止力や外交における優位確保のために使用されています。他にも戦争、テロなどが行われており、たくさんの人が亡くなっています。今回、広島で学び、世界の現実と向き合い、気持ちや思いをたくさんの人と交わしました。自分自身の思いをしっかりと持ち、相手に伝えていく。そして相手を受け入れる。コミュニケーションが平和への一歩だと私は思います。今ある生活に感謝し、今回の経験を共有していきたいと思います。

忘れない。伝える

松本秀峰中等教育学校2年

千葉 聡希

1945年8月6日午前8時15分、人類史上初の原子爆弾「リトルボーイ」が広島島の島病院上空約600メートルで炸裂した。晴れわたった穏やかな夏の朝は、一瞬で地獄と化した。爆風と熱線は街を焼き尽くし、人々の命と日常を奪い去った。

私は8月5日から7日にかけて、松本市の「広島平和記念式典参加事業」に参加した。3日間の体験は、私の価値観を根本から揺さぶった。

初日、昼食会場を訪れた後、「全国平和学習の集い」に参加した。そこでは全国から集まった中学生たちと、広島のことや戦争について語り合った。しかし何より心に深く刻まれたのは、94歳の被爆者・梶本淑子さんの話だった。

梶本さんは原爆投下当時14歳で、爆心地から約2.3km離れた工場で作業していた。当時の中学生は建物疎開や軍需品製作に動員され、遊びも学びも奪われていたという。原爆投下時、原爆によって閃光と爆風に襲われ、梶本さんは気を失った。目を覚ますと、工場の外は焼け野原で、人々の皮膚は焼け爛れていた。街は匂いと静寂に包まれていたという。

梶本さんが言った言葉、「無知と無関心は、戦争やいじめと同じ」。その瞬間、自分は今まで広島のことを何も知らず、知ろうとしなかったことに気づいた。心の奥底に恥ずかしさと怒りが入り混じる感情が広がり、歴史から目をそらすことは許されない事だと感じた。

二日目の午前、私は「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に参列した。広島県知事や内閣総理大臣の言葉、そして小学校6年生の

代表が大勢の前で堂々と読み上げた平和への誓い。その姿に胸が震えた。真夏のひざしは容赦なく照りつけ、額から汗が流れ落ちたが、その暑さすら意識から消えるほど、式典の空気は張り詰め、おごそかだった。

午後は江田島の旧海軍兵学校へ向かった。ここには多くの戦死者や特攻隊員の名前が刻まれていた。一つ一つの名前の背後に、笑い声や夢、家族との時間があつたはずだ。それら全てが戦争によって奪われた現実を前に、怒りが収まらなかった。

最終日は、広島平和記念資料館を訪れた。そこに展示されていた写真や遺品は、教科書では決して感じ取れない生々しさを放っていた。皮膚が爛れ落ちた人、身体に現れた「死の斑点」、そしてわずかな時間差で放射線によって命を落とした人々。原爆は、その瞬間だけでなく投下後も長く人々の命を蝕んでいったことを知り、言いようのない恐怖を覚えた。

現代を生きる私たちは、あの惨状を忘れつつある。しかし平和は、忘れることで簡単に崩れ去る脆いものだ。梶本さんの言葉を思い出す。「無知と無関心は、戦争やいじめと同じ」。知らないままにいることは、再び地獄への扉を開くことと同じだ。

私はこの3日間で、戦争の悲惨さを伝え続けることが、今を生きる者の責務であると強く感じた。広島で見た光景、聞いた声、感じた熱を、私は忘れない。そして、必ず誰かに伝えていく。それが、平和を守る小さな一歩だと信じている。

私が学んだ平和の大切さ

松本国際中学校2年

藍 つかさ

もしも、自分の大切な町が一瞬でなくなってしまったら、私はどうするだろうか。広島を訪れてそんな問いが心に浮かびました。

一九四五年八月六日午前八時十五分、その一秒前まで人々はいつも通りの朝を過ごしていました。家族と朝食を食べていた人、学校へ向かっていた子どもたち。しかし、その一瞬の後、広島は街は原子爆弾によって壊滅しました。

原爆ドームを目の前にしたあと私たちはそのすぐ近くにある平和記念資料館を見学しました。そこには、爆風で溶けたガラスや、原爆で焼けてしまった子どもたちの服があり、日常が一瞬で奪われる現実を感じました。

また、そこで梶本さんという女性の被爆者の話を聞きました。梶本さんは当時十四歳で、私たちとあまり年が変わらない年齢でした。中学生たちが建物疎開の作業をしている中、爆風で目の前の土地が潰れ、窓ガラスが真っ青になり、手で耳、鼻、頭を押さえながら必死で逃げたそうです。腕の皮膚が溶けて全身が真っ赤になりながらも、友達のもとに移動し、学校で学んだ手当てをしたと言います。人々はどろどろに溶けた体を痛めないため、両手を前に上げてお水のある方に進んでいったそうです。

さらに、梶本さんは広い公園で友達を助けるために何回も行き来して歩き続けたと話してくれました。その最中、人を踏んでしまう感覚

や、匂いのひどさで気持ちが悪かったけれど、友達を助けることが最終目標だったため足がボロボロになっても歩き続けました。お水をくださいと大人の人に頼んでも、自分が生き残るため、少しもわけてくれなかったそうです。その姿を見て、梶本さんは「人間の本当の姿がわかる」と感じたと言っていました。

梶本さんのお話を聞いて、私は戦争の悲惨さだけではなく、人を思いやることや、信じ合うことの大切さを強く感じました。この広島での体験を通して、私は平和は当たり前ではないということを深く理解しました。そして、これからは日常の中で人を大切にしたり、争いを避けたりすることで、少しでも平和のために役に立つことをしたい、力になりたいと思えました。私たち一人一人ができることは小さなことかもしれませんが、きっと私たちの未来の平和につながっていくものだと思っています。広島で学んだことを忘れず、周りの人に優しく接し、お互いに思いやる気持ちを広げていきたいです。

広島訪問

松本ユース平和ネットワーク 松本県ヶ丘高等学校

高山 稀創

8月6日、広島市内で式典と原爆ドームを訪ねた。式典には120の国と地域、団体の大使や駐在員が参加していた。また、私の想像をはるかに超える人数の一般参加の外国人が平和公園を訪れていた。その光景を見て私は少し驚いた。ニュースを見ていると代表の人を中心に報道されているが、各国大使以外にも多くの人が関心を持って式典に来て、平和を願っていることを知りとてもうれしかった。

午後は江田島に移動して旧海軍兵学校を訪れた。明治時代から海軍の幹部になる者を育てる国内唯一の学校として、また、現在でも海上自衛隊幹部候補生学校として他とは違う役割を果たしてきた江田島の旧学校。資料館には江戸時代末期からの海軍、海上自衛隊の歴史を示すものが展示されていた。資料館の後半では第2次世界大戦について記録されている。始めの部屋は木の壁になっておりほかの部屋とは一線を画す雰囲気があった。そこには戦時中に特別潜航艇や神風特別攻撃隊、回天などで亡くなっていった隊員の名前が大きな石に彫られて壁に並べられていた。その名前の多さに衝撃を受けた。そして一緒に展示してあった隊員の遺書や、のちに回収された零式艦上戦闘機の破片や回天の潜望鏡を目にしてなんとも言い表せない気持ちになった。戦時中、江田島には戦争によって足りなくなった将校の数を補うかのように多くの学生が来ていた。その中から特別

攻撃隊に志願した人も多くいたと思う。また、回天に乗って亡くなった隊員の中には私と年が遠くない隊員もいた。そんな隊員たちが国や自分の家族を守るために特別攻撃隊で命を落としていった記録を見て、戦争はいろいろなものを失うと感じた。遺書はそれぞれ固い決意を表すようにきっちりとした字で書かれているもの、恐怖心を持ちながらも自分に言い聞かせながら書いたように文字が震えているものなど、隊員の声が聞こえてくるような感じがして、この想いを私たちは心に刻まなければならないと強く感じた。

現代では戦争は特別攻撃隊のように人が直接攻撃をするというものよりも人工知能を使った攻撃やドローンなどの無人機を使った攻撃が主流になってきている。その場にいなくても人を殺せる状態にあり、一度に何万人も殺せる核兵器が脅しの道具として使われている今、かつての戦争を多くの人に伝えて「人が死ぬ」、「人を殺す」ということの意味、悲しみや苦しみを想像し、一人ひとりが再確認して共有していく必要があると感じた。

戦争は命を奪い、原爆は一瞬ですべてを奪う。こんなことがもう二度と起こらないように、そして今起きてしまっている戦争が一刻も早く終わるように、世界中の人と学び祈り続けたいと思う。

広島で感じた「平和」の重さ

松本ユース平和ネットワーク 松本県ヶ丘高等学校

藤岡 絢香

私は小学校低学年の頃、広島原爆に関する本を読みました。そこには焼け焦げた街の描写や、逃げ惑う人々の姿が生々しく描かれており、幼いながらに強い衝撃を受けたことを覚えています。それ以来、私は「戦争は怖くて悪いものだ」と漠然と感じるようになり、その恐ろしさから目を背けて生きてきました。

だからこそ、今回広島に行くことが決まった時、「今度こそ自分の目でしっかり見て、考えよう」と心に決めました。

電車を乗り継いで広島の地に降り立ったとき、最初に感じたのは、街の美しさでした。松本のように城下町の名残をとどめた入り組んだ道とは違い、広島街は碁盤の目のように整い、大通りは広く、現代的な建物が立ち並んでいました。かつて原爆によって街全体が壊滅し、そこから一から復興したからこそ、この整った街並みがあるのだと知り胸が痛みました。そこで、戦争は「遠い過去の出来事」ではなく、今の私たちの生活と地続きの現実なのだと実感しました。

平和祈念資料館を訪れたとき、原爆の悲惨さと平和の尊さを改めて深く考えさせられました。展示室には、被爆した人々の遺品や写真、原爆投下直後の街の模型などが並び、当時の惨状がありありと伝わってきました。焼け焦げた衣服や溶けて形を失ったガラス瓶など、どれも

「一瞬で日常が壊れた」という事実を突きつけてきて、言葉を失いました。

中でも特に印象に残ったのは、被爆した少女・佐々木禎子さんの折り鶴でした。禎子さんは放射能の影響で白血病を患いながらも、「元氣になりたい」という一心で千羽鶴を折り続けたといわれています。その小さな鶴には、強い祈りが込められており、目にした瞬間、胸の奥が熱くなりました。禎子さんの願いは、今も「原爆の子の像」とともに世界中の人々に平和の大切さを伝えています。

今回の見学を通して、戦争や原爆の悲劇を「過去の出来事」として片づけてはいけなかったと感じました。そこに刻まれているのは、人間の苦しみ、そして再び争いを起こしてはならないという強い願いです。私たち一人ひとりが平和について考え、その思いを次の世代へ伝えていくことこそが、犠牲になった人々への最大の追悼なのだと思います。資料館で見たすべての展示が、「二度と同じことを繰り返してはいけない」という無言の訴えとして、今も心に深く残っています。

広島で学んだ平和への意識

松本ユース平和ネットワーク 松本県ヶ丘高等学校

山崎 花峰

私は、松本市平和記念式典参加事業に参加させていただき約1年前、中学校3年生の修学旅行で広島平和記念資料館を訪れました。その時に受けた衝撃は今でも忘れることができません。今までなんとなく抱いていた自分の中の浅はかな認識が、音を立てて崩れ去るように感じました。80年前の当時の状況をそのまま残す多くの展示品や、残された原爆で大切な人を失った遺族の方の言葉。そして何よりも、原爆の悲惨さを無言で訴えかけてくる原爆ドームの姿。そのどれもがあまりにも衝撃的で、思わず目を覆いたくなるような光景でした。胸がきゅっと締め付けられるように苦しくなりましたが、現地に来たからには、自分の目でよく見て、被爆者の方々の気持ちを理解しなければならぬと強く思いました。私はその修学旅行をきっかけに、改めて戦争について深く考えるようになりました。

それから1年経ち、今度は松本ユース平和ネットワークの一員として、この事業に参加する機会をいただくことができ、とても嬉しく思いました。

平和記念式典の当日、会場には数えきれないほど多くの人が集まっていました。外国から訪れている方々も大勢いらっしゃいました。その光景を目にして、私は人の多さに驚くと同時に、この式典がどれほど大切なものなのかを実感しました。終戦から80年という長い年月が経ち、幸いにも今の日本に住む私たちにとって

「戦争」という言葉が日常的に意識されることは減ってきています。しかし、だからこそ平和記念式典の開催を通じて、1年に1度は戦争について考える機会が必要なのではないでしょうか。私たちは憲法の三原則のうちの一つに「平和主義」を掲げる国に暮らしています。平和な日常を当たり前のものだと思う、それだけが平和についての意識を持ち続ける必要があるのではないか、私はそう考えています。

式典の翌日、1年ぶりに訪れた資料館は、あの時と変わらず我々に平和の大切さを訴えかけてきました。再び資料館の展示を見て、私は新たな思いを抱きました。それは「より多くの人に戦争について知ってほしい」ということです。私は、広島を訪れるまであまり戦争のことや原爆のことについて十分に理解しておらず、現地に行って初めてその重大さを実感しました。私のように、これまで戦争について漠然としたイメージしか持っていなかった人にも、ぜひ平和記念資料館を訪れてほしいです。戦争について、原爆について、そして平和について考えるきっかけになるはずです。

この2泊3日の旅では、全国の学生の方々と平和について話し合ったり、江田島旧海軍兵学校を訪れたり、普段の生活では得られない貴重な時間を過ごすことができました。この旅を通じて私は多くの経験をし、たくさんの学びを得ました。今後も、あの日に見た光景と平和への想いを忘れずに生きていきたいと思います。

広島の旅を終えて

松本ユース平和ネットワーク 松本県ヶ丘高等学校

花岡 佑紀

8月6日、僕たちは広島へと足を運びました。目的は、8月6日におこなわれる平和記念式典に参加し、戦争や平和について自分の目で見て、学ぶことでした。原爆ドームの前に立った瞬間、これが実際に被爆した建物なのかと、言葉を失いました。今こそ、静かに佇んでいるものの、爆風によって吹き飛ばされたレンガや鉄屑が、当時の残酷さを物語っているように感じました。

式典の会場には多くの人々が集まり、黙とうの時間には、会場全体が一斉に静まりかえりました。その瞬間、目には見えない祈りのようなものが、会場内に満ちているように感じました。小さな子どもから高齢の方までが一緒に手を合わせる姿は、「二度と繰り返してはならない」という強い願いを物語っていました。

平和記念資料館では、被爆者の遺品や証言、写真などが展示されていました。特に印象に残っているのは、ある少年が残した焼け焦げたお弁当箱です。中には黒く炭化したご飯が少し残っていて、見た瞬間、胸が締めつけられました。そのお弁当が語る「一瞬で奪われた日常」は、僕に戦争の恐ろしさを強く伝えてくれました。

広島を訪れて感じたのは、戦争は過去の出来事ではなく、「今」も考え続けなければならない問題だということです。平和は当たり前ではなく、多くの人の願いや努力によって守られて

いるのだと気づきました。

また、僕はこの先平和に向けてどのような行動を取ればいいのか考えるようになりました。誰かにこの体験を話すこと、資料を読み続けること、そして関心を持ち続けること。大きなことはできないかもしれないけれど、小さな行動の積み重ねが、平和をつくる力になるのではないかと思います。広島での一日は、私にとって忘れられない学びの時間となりました。

写真記録

8月5日（火）

全国平和学習の集い

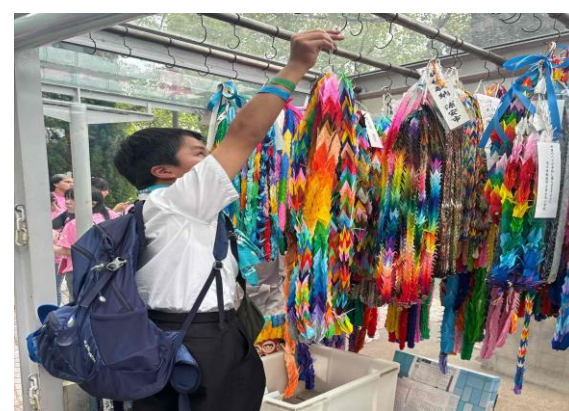


8月6日（水）

広島平和記念式典



平和記念公園見学（原爆ドーム・折鶴献呈）

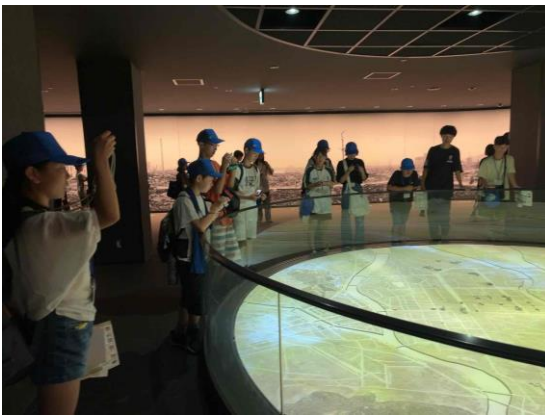


江田島旧海軍兵学校



8月7日 (木)

平和記念資料館見学



平和への誓い

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。

同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。

誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。

涙とともに止まらない、絶望の声。

一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から80年が経つ今、

本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、

直接話を聞く機会は少なくなっています。

どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、

記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。

大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。

多様性を認め、相手のことを理解しようとする事。

一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、

傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。

周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、

いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。

One voice.

たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。

大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。

あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、

私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。

令和7年8月6日

こども代表 広島市立皆実小学校 6年 関口 千恵璃

広島市立祇園小学校 6年 佐々木 駿

平 和 宣 言

今から80年前、男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていたこの広島で、体中にガラスの破片が突き刺さる傷を負いながらも、自らの手により父を茶毘に付した被爆者がいました。

「死んでもいいから水を飲ませて下さい！」と声を振り絞る少女に水をあげなかったことを悔やみ、核兵器廃絶を叫び続けることが原爆犠牲者へのせめてもの償いだと自分に言い聞かせる被爆者。原爆に遭っていることを理由に相手の親から結婚を反対され、独身のまま生涯を終えた被爆者もいました。

そして核兵器のない平和な世界を創るためには、たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話をしてみることが大事であり、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神を若い世代へ伝え続けた被爆者。こうした被爆者の体験に基づく貴重な平和への思いを伝えていくことが、ますます大切になっています。

しかしながら、米国とロシアが世界の核弾頭の約9割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混迷を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。各国の為政者の中では、こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためには、核兵器の保有もやむを得ない。」という考え方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲慘な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

このような国家が中心となる世界情勢にあっても、私たち市民は決してあきらめることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければなりません。そのために、次代を担う若い世代には、軍事費や安全保障、さらには核兵器のあり方は、自分たちの将来に非人道的な結末をもたらす得る課題であることを自覚していただきたい。その上で、市民社会の総意を形成するための活動を先導し、市民レベルの取組の輪を広げてほしいのです。その際に心に留めておくべきことは、自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。こうしたことを踏まえれば、国家は自国のことのみに専念して他国を無視してはならないということです。

また、市民レベルの取組の輪を広げる際には、連帯が不可欠となることから、「平和文化」の振興にもつながる文化芸術活動やスポーツを通じた交流などを活性化していくことが重要になります。とりわけ若い世代が先導する「平和文化」の振興とは、決して難しいことではなく、例えば、平和をテーマとした絵の制作や音楽活動に参加する、あるいは被爆樹木の種や二世の苗木を育てるなど、自分たちが日々の生活の中でできることを見つけ、行動することです。広島市は、皆さんが「平和文化」に触れることのできる場を提供し続けます。そして、被爆者を始め先人の助け

合いの精神を基に創り上げられた「平和文化」が国境を越えて広がっていけば、必ずや核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すことになります。

世界中の為政者の皆さん。自国のことのみに専念する安全保障政策そのものが国と国との争いを生み出すものになってはいないでしょうか。核兵器を含む軍事力の強化を進める国こそ、核兵器に依存しないための建設的な議論をする責任があるのではないですか。世界中の為政者の皆さん。広島を訪れ、被爆の実相を自ら確かめてください。平和を願う「ヒロシマの心」を理解し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けた議論をすぐにでも開始すべきではないですか。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、また恒久平和を念願する国民の代表として、国際社会の分断解消に向け主導的な役割を果たしていただきたい。広島市は、世界最大の平和都市のネットワークへと発展し、更なる拡大を目指す平和首長会議の会長都市として、世界の8,500を超える加盟都市と連帯し、武力の対極にある「平和文化」を世界中に根付かせることで、為政者の政策転換を促していきます。核兵器禁止条約の締約国となることは、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会を含む被爆者の願いに応え、「ヒロシマの心」を体現することにほかなりません。また、核兵器禁止条約は、機能不全に陥りかねないNPT(核兵器不拡散条約)が国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として有効に機能するための後ろ盾になるはずです。是非とも来年開催される核兵器禁止条約の第1回再検討会議にオブザーバー参加していただきたい。また、核実験による放射線被害への地球規模での対応が課題となっている中、平均年齢が86歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩にしっかりと寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆80周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、決意を新たに、人類の悲願である核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に、これからも力を尽くすことを誓います。

令和7年8月6日

広島市長 松井 一實

参加者一覧

参加生徒

学 校 名	氏 名	学 校 名	氏 名
清水中学校	あきやま 秋山 ゆうと 優人	明善中学校	かとう 加藤 ゆうま 優真
鎌田中学校	なかがわ 中川 あいな 愛夏	信明中学校	うえやま 上山 ともみ 智実
丸ノ内中学校	すどう 須藤 みはる 美遥	会田中学校	よこうち 横内 ひより 日和
旭町中学校	みやがわ 宮川 さなき 彩奈咲	安曇中学校	おおた 太田 みこと 美言
松島中学校	みやばやし 宮林 あいり 愛理	梓川中学校	さえぐさ 三枝 こうう 光宇
高綱中学校	つるかわ 鶴川 ちひろ 千尋	波田中学校	わだ 和田 まこと 真
菅野中学校	まるやま 丸山 れん 恋	鉢盛中学校	あみの 網野 はる 晴琉
筑摩野中学校	おがさわら 小笠原 こころ 心南	信大付属松本中学校	きとう 鬼頭 たけあき 岳暁
山辺中学校	さわど 澤渡 ちづき 千月	才教学園中学校	にしむら 西村 あやの 綾乃
開成中学校	もとほし 本橋 ゆうづる 侑弦	松本秀峰中等教育学校	ちば 千葉 さとき 聡希
女鳥羽中学校	ほその 細野 りゅうと 琉斗	松本国際中学校	らん 藍 つかさ つかさ

松本ユース平和ネットワーク

所 属	氏 名
松本県ヶ丘高等学校 2年	たかやま 高山 きづく 稀創
松本県ヶ丘高等学校 2年	ふじおか 藤岡 あやか 絢香
松本県ヶ丘高等学校 1年	やまさき 山崎 かほ 花峰
松本県ヶ丘高等学校 2年	はなおか 花岡 ゆうき 佑紀

事務局

所 属	役 職 等	氏 名
菅野中学校	教 諭	ありま 有馬 ふとし 太志
会田中学校	教 諭	わだ 和田 ゆきえ 幸恵
平和推進課	主 任	いけだ 池田 あやね 彩音

旅の日程

	時 間	項 目	備 考
8 月 5 日 (火)	6:30	松本駅東西自由通路へ集合	受付
	6:35	出発式	
	7:04~9:18	松本駅 ⇒ 名古屋駅	しなの2号
	9:41~11:59	名古屋駅 ⇒ 広島駅	のぞみ61号
	12:00~12:10	広島駅 ⇒ 昼食会場	徒歩
	12:15~12:50	昼食	
	13:00~13:20	昼食会場 ⇒ 広島国際会議場地下2階 「ヒマワリ」	貸切バス
	13:30~16:45	令和7年度 「全国平和学習の集い」	
	17:00~17:15	広島国際会議場 ⇒ ホテル	貸切バス
	17:20頃	オリエンタルホテル広島 着	
	18:00~19:00	夕食（ホテル）	
6 日 (水)	6:00~（予定）	朝食（ホテル）/フロント7時集合	
	7:10~7:30	ホテル ⇒ 広島平和記念公園	徒歩
	7:30~8:45	広島平和記念式典	
	8:45~10:30	広島平和記念公園内見学	折鶴献呈
	10:45~11:30	広島平和記念公園 ⇒ 昼食会場	貸切バス
	11:40~12:20	昼食	
	12:30~13:10	昼食会場 ⇒ 江田島旧海軍兵学校	貸切バス
	13:30~15:00	江田島旧海軍兵学校見学	
	15:00~16:30	江田島旧海軍兵学校 ⇒ ホテル	貸切バス
	16:30頃	オリエンタルホテル広島 着	
	17:00~18:00	夕食（ホテル）	
7 日 (木)	6:30~7:10	朝食（ホテル）/7時50分フロント集合	
	8:00~8:30	ホテル ⇒ 広島平和記念公園	徒歩
	8:30~10:30	広島平和記念資料館等見学	班ごと見学
	10:30~11:00	広島平和記念公園 ⇒ 広島駅	貸切バス
	11:00~11:45	広島駅（お土産）	
	12:03~14:19	広島駅 ⇒ 名古屋駅	のぞみ24号 （車内で昼食）
	15:00~17:04	名古屋駅 ⇒ 松本駅	しなの17号
	17:10	解散式（松本駅東西自由通路）	

平和都市宣言

世界の恒久平和は人類共通の願いである。

われわれは、平和を愛するすべての人々とともに、
核兵器の廃絶と戦争のない明るい住みよいあすの郷土
を願い、ここに「平和都市」の宣言をする。

昭和61年9月25日

宣言の趣旨は、平和の確保・核兵器の廃絶を願いとしています。

私たち松本市の「平和都市宣言」が力強い宣言となるよう、暮らしに根ざして、
平和の願いを大きく、根強く、たくましく育て続けていくことが大切です。

ひろしま レポート

第35回広島平和記念式典参加事業

2025.10

編集発行:松本市 総務部 平和推進課



松本市役所前庭に設置されている「平和の^{ともしび}灯」

松本市では、松本市平和都市宣言の理念に基づき、一人ひとりが命を大切にし、永久に平和であることを願い、平和を創る取り組みを広げるため、「平和の灯」を灯しました。

この灯が市民の平和のシンボルとなり、多くの皆さんが命の大切さや平和の尊さを考え、平和の連鎖がより一層広がっていくことを願っています。

